



○ ユリノキとヒマラヤスギにメタセコイア

“故郷の「学校の木」巡り”という島根日々新聞の連載記事で、掛合分校の「メタセコイア」が平成30年6月7日の117回で、三刀屋高校の「ユリノキとヒマラヤスギ」が同年6月14日の118回で紹介されました。たまたまこの連載記事の著者が私の叔父と言うことも単なる偶然ではないのかなと感じているところです。



校長室にある『掛合町誌』をめくってみると、掛合町が高校設置運動をはじめたのが1952(昭和27)年の秋頃で、設置認可が翌年の春。開校式、入学式は同年5月1日で、農業科、家庭科合わせて26名の入学があったと書かれています。旧掛合中学校の教室を仮校舎としていたため、創設当時の校舎の写真にはメタセコイアは写っていません。

『掛合町誌』には、1984(昭和59)年頃の現在の分校校舎の写真も並んで掲載されていますが、そこにはすでに大きく成長したヒマラヤスギと3本のメタセコイアが確認できます。現在の校舎が完成したのが1957(昭和32)年1月で、第1回の卒業式が新築の独立校舎で挙げてきたことは大きな喜びであったと町誌には書かれています。それもそのはずで、「校舎建築に先だち、町の財政に余裕がなく、県からの支出も望めず、建設費の財源をどうするかが問題となったが、町民が農協へ貯金し、農協が町に貸し付ける方法で工面した」と『創立十周年記念誌』に書かれているように、地元の高校に対する熱意はひとかたならぬものがあり、教材や教具などは他校に先がけて準備されたと記念誌に書かれているほどで、地元にとって悲願の校舎完成だったとわかります。『創立三十周年記念誌』には、完成したばかりの新校舎の写真が掲載されていますが、まだ植えたばかりの人の背丈くらいのヒマラヤスギとメタセコイアが、よく見ると確認できます。校舎完成を喜ぶ地元民によって植えられた、と連載記事では紹介しています。

一方、三刀屋高校の木は、旧正門を固めるように対で立っているヒマラヤスギと、記念館「蒼雲館」の西側に高さ15メートルを超えるユリノキがシンボルツリーとして紹介されています。先述したように、ヒマラヤスギは、掛合分校にも1本だけ植えられています。ちなみに、旧正門の門柱一対には、自然石ではありませんが大理石の銘板があり、その上にあるレリーフにはどこかしら欧風的なものを感じます。旧木造校舎で唯一残っている記念館「蒼雲館」にも同じことを感じます。昔でいうハイカラな学校という印象がしたのは私だけでしょうか。

連載記事では、「三刀屋の川の水清く 夜昼流れやまぬごと 疲れず倦まず励まし 我が雲南の健男児」と歌われる昭和3年に制定された旧制三刀屋中学校の校歌を冒頭で紹介しています。これは、「倦(う)むことなく、つまり嫌にならず 勉強せよと教え導くために、幾千年も流れを止めず、ふるさとを生き育てた母なる清流に人の歩むべき姿がある」という意味だと紹介していますが、『三刀屋高等学校五十年史』にもそのように書かれています。この記念史には、「旧校舎・玄関付近」の写真があります。同じ写真は、三刀屋高校ホームページにリンク(バナー)がある卒業生会である雲南会のホームページでも見ることができます。その写真には、すでに成長したユリノキが確認できることから、当時の校舎が完成した大正末期にはすでに植えられていたと推察されますが、記念史等からはそうした記載や記録が確認できませんでした。

ユリノキは耐寒性のある落葉高木で、花言葉は「幸福」。ヒマラヤスギは、マツ科の常緑高木で、花言葉は「たくましさ」です。メタセコイアは、「平和」や「楽しい思い出」という花言葉がある、ヒノキ科(またはスギ科)の落葉樹です。

三刀屋高校は、2024年に100周年を、掛合分校は2023年に70周年を迎えます。創立記念事業を通して、これまでの歴史と伝統の重みを感じ、その誇りを力に変えていくとともに、地域とともにある学校であることを再認識したいと思います。